Ⅲ部　　基調報告　新羅郡域の遺跡

「新座市の遺跡」

講師：　川　畑　　隼　人

（新座市教育委員会）

新座市

１．地形

新座市は埼玉県南西端に位置し、荒川水系の柳瀬川と黒目川が市の南西から北東に向けて流れている。２本の川に挟まれた野火止台地は、武蔵野台地の北東端に「八ツ手」葉状に広がる一支台であり、幅２～３㎞、長さ十数㎞の舌状台地である。柳瀬川より北西部には所沢台地､黒目川より南東部には朝霞台地と呼ばれる台地が広がり､両河川沿いは沖積低地となっている。

市内の遺跡は、両河川の台地縁辺部に分布しており、周知の埋蔵文化財包蔵地として１０８か所が登録されている。黒目川沿いでは旧石器時代の市場坂遺跡、縄文時代の嵯峨山遺跡が、それぞれ埼玉県選定重要遺跡として知られている。柳瀬川沿いでは弥生・古墳時代の新開遺跡が発見され、野火止台地中央部では近世の新田開発と野火止用水の開削に至るまで、生活の痕跡が見られない。

２．奈良・平安時代の新座市

本市の名称の由来ともなっている新羅郡に関連し、奈良・平安時代に関する遺跡への関心は高かったが、次項で詳説する大和田カミ遺跡の発見までは、黒目川左岸の馬場南遺跡（No.10）と駒形遺跡（No.66）において、住居跡１軒ずつと須恵器坏や瓦片等がわずかに発見されるのみであった。また、柳瀬川沿いの普光明寺と大和田郷、黒目川沿いの法台寺と片山郷は、それぞれ鎌倉時代には成立していたことが確実であるが、寺や周辺の町がどこまで溯ることができるのかは、検討資料が限られている状況である。そのため、次項の大和田カミ遺跡郡の発掘調査の成果は、新座市の古代史を塗り替える発見となっている。

３．大和田カミ遺跡群の概況

平成２８年度から、新座市の北西部において大和田二・三丁目地区土地区画整理事業が着手された。大和田二・三丁目地区は、柳瀬川、国道２５４号バイパス、ＪＲ武蔵野線、東京都清瀬市との都県境に囲まれた約５０ha の広大な区域である。地区内には、大和田カミ遺跡（No.005）、大和田グラウンド遺跡（No.035）、三本木遺跡（No.047）、新座市遺跡番号048 遺跡（No.048）、頭戸遺跡（No.104）の５つの埋蔵文化財包蔵地が所在し、これらを総称して大和田カミ遺跡群と仮称している。

区画整理事業が開始されるまで、当該地で実施された発掘調査は頭戸遺跡における２地点のみであり、いずれも縄文時代の遺構と考えられる。そのため、わずかな試掘調査と畑で表面採集された資料から、奈良・平安時代の遺跡の存在は推測されていたものの、広範囲に遺構が広がる集落であるとは想定されていなかった。

ところが、詳細な試掘調査を実施した結果、特に平安時代の住居跡がまとまって発見されており、３遺跡・１２地点・約５．５万㎡の発掘調査が行われている。現在、整理作業を進めている途中ではあるが、奈良・平安時代の調査成果の概要を紹介する。

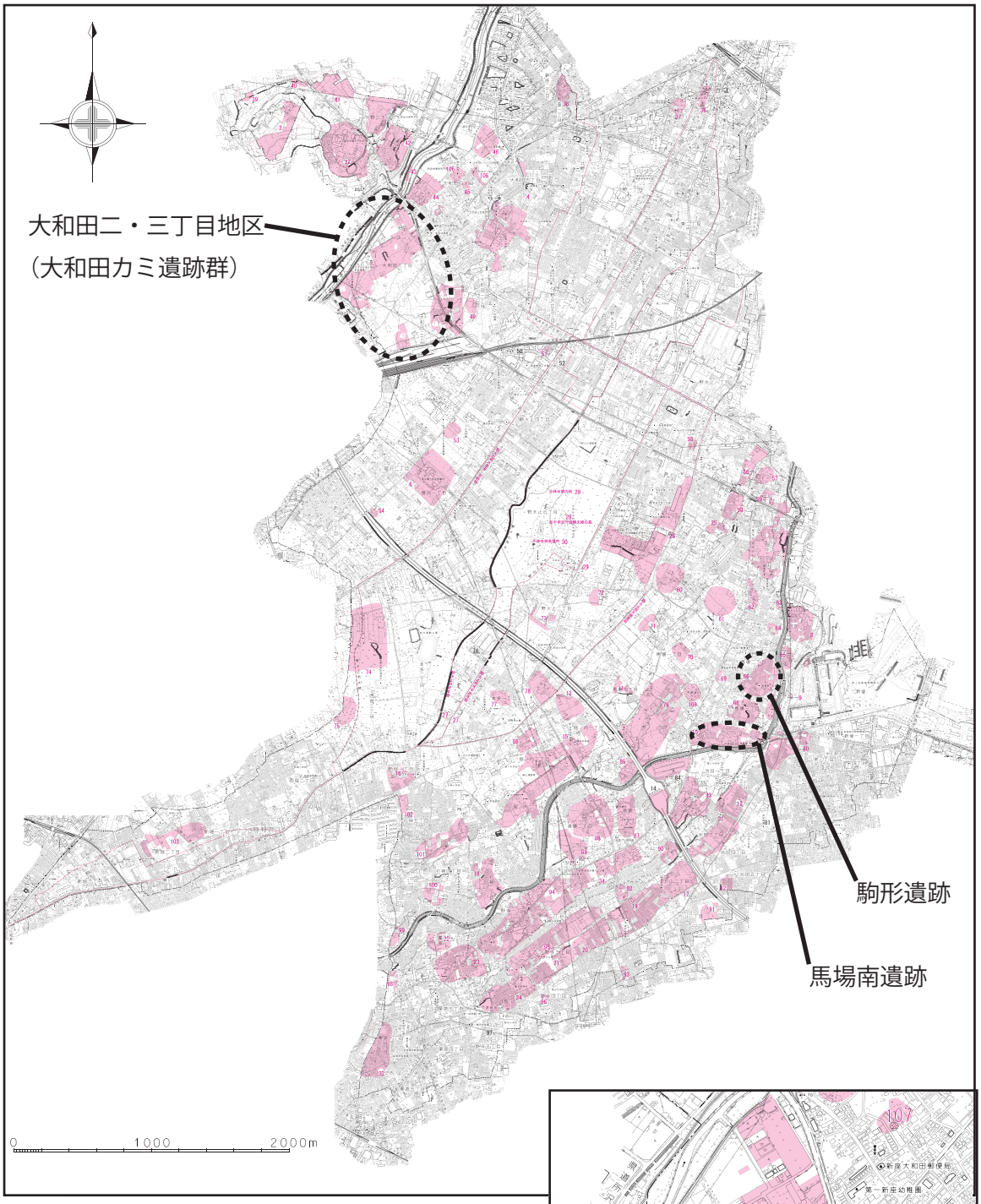

図１：新座市の周知の埋蔵文化財包蔵地と奈良・平安時代の遺跡

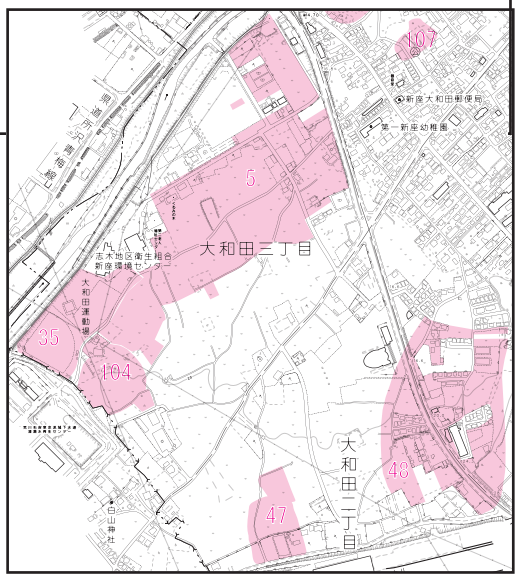

図２：大和田カミ遺跡群拡大図

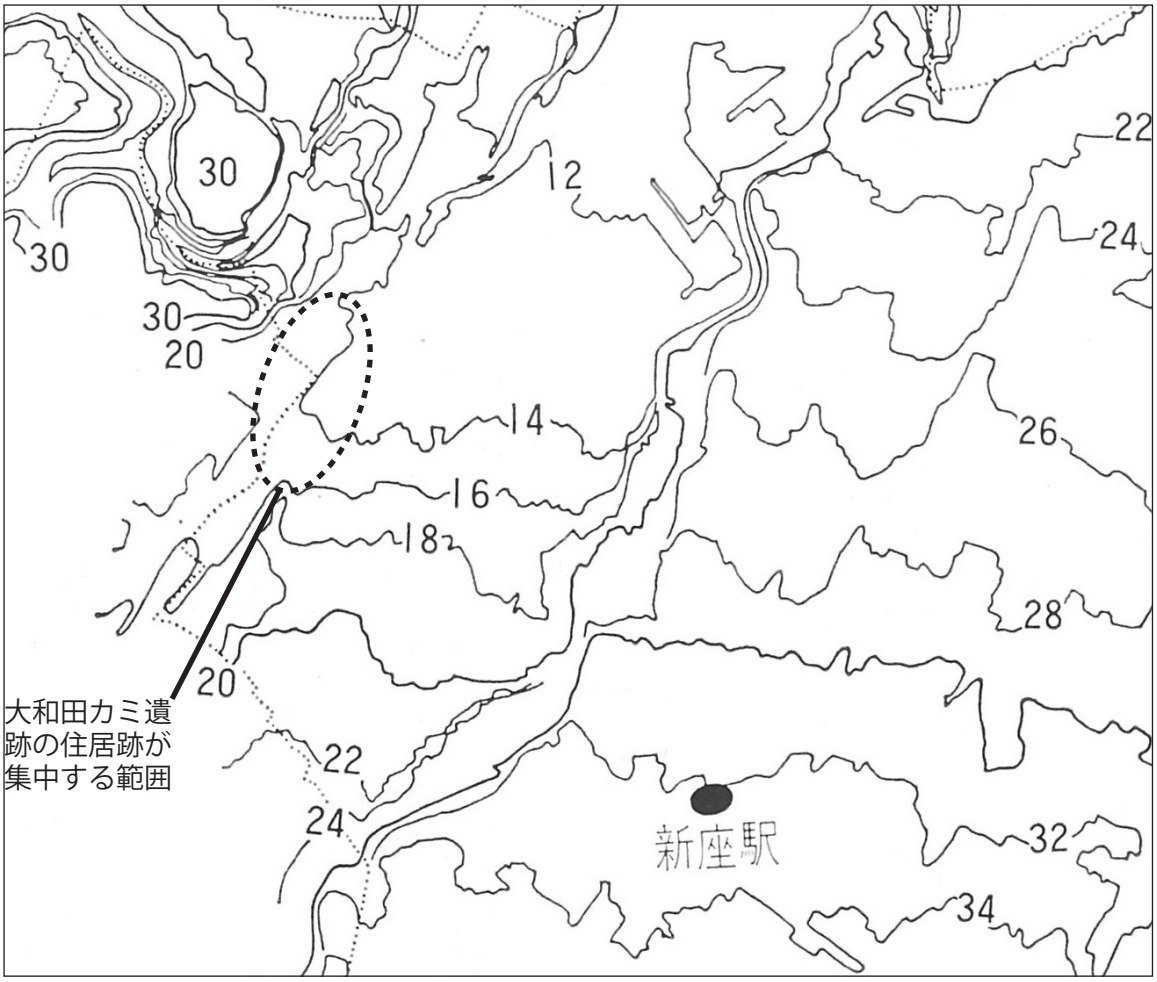

図３：大和田カミ遺跡出周辺の等高線（『新座市史』第１巻から抜粋・加筆）

大和田カミ遺跡は柳瀬川中流右岸に位置しているが、１０m程度の比高差を持つ野火止台地の崖線とは異なり、台地から柳瀬川に向かって緩やかな斜面が形成されている。関東ローム層の堆積は薄く、幾度もの河川増水や流路変更によってもたらされた礫層やシルト層が複雑に入り交じる中、縄文・古墳・奈良・平安・鎌倉時代の各遺跡は斜面下方の川沿いに展開する。同じ柳瀬川沿いでも、弥生・古墳時代の新開遺跡が、台地の縁辺部に展開する状況とは対照的である。

柳瀬川は現在の位置で護岸される以前、氾濫や洪水が頻発しており、川沿いには昭和３０年代まで水田が広がっていた。現地形は大正耕地整理の際に大きく改変されたものであるが、川沿いの窪地等は旧河道の痕跡と考えられる。さらに現在は見られないが、ＪＲ貨物ターミナル付近には湧水点があったと言われ、「強清水 (こわしみず)」という民話も残っている。

また、大和田カミ遺跡の西隣には清瀬市の下宿内山遺跡があり、大規模かつ長期に渡る集落跡が調査されている。両遺跡は数百mしか離れておらず、同時期の住居跡もあることから、連続した集落であると捉えてよいだろう。さらに、柳瀬川の対岸には所沢市の谷戸遺跡、西進すると東山道武蔵路（東の上遺跡）や滝野城跡もあり、古代史や中世史を解明していくためには、これらを併せて検討していく必要がある。

※　文中・図中の遺構名等は整理段階のものであるため、今後、変更される可能性がある。

図４：大和田カミの発掘調査範囲（平成３０年１１月時点）

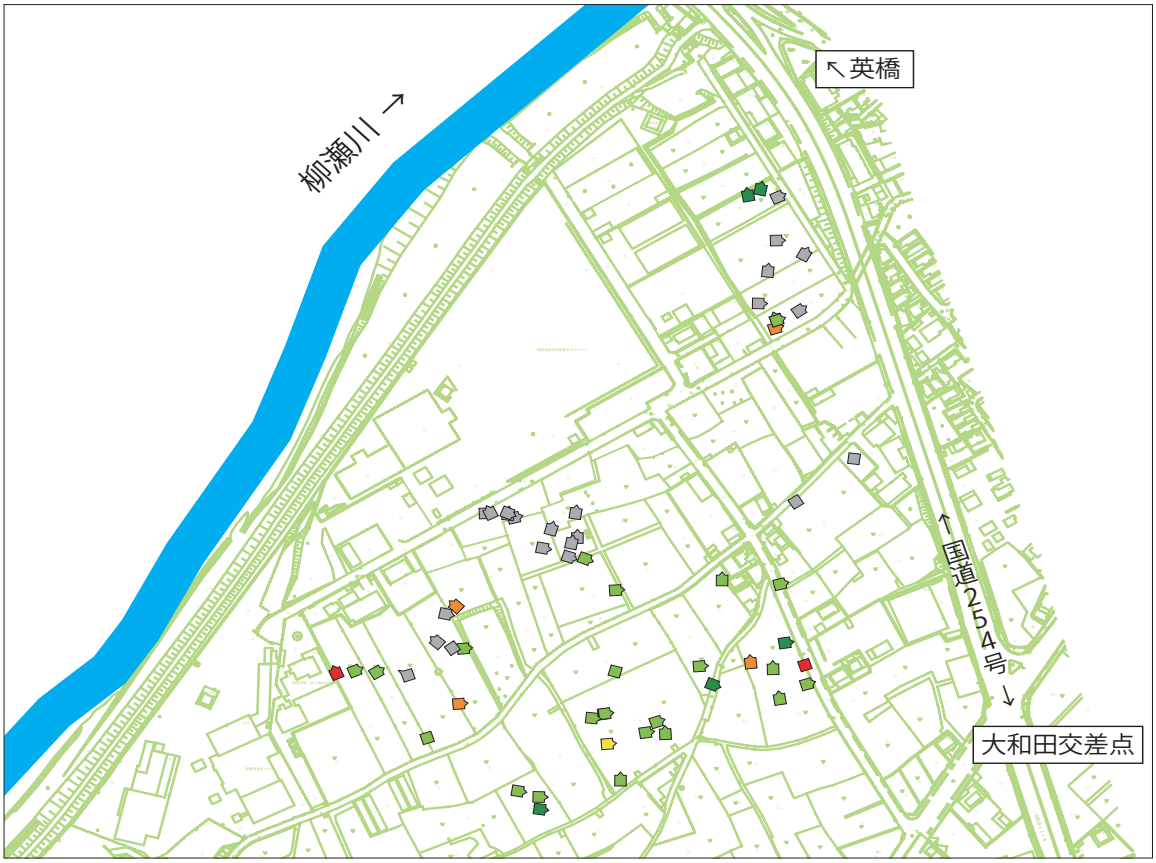

図５：大和田カミ遺跡出土の奈良・平安時代の住居跡の分布

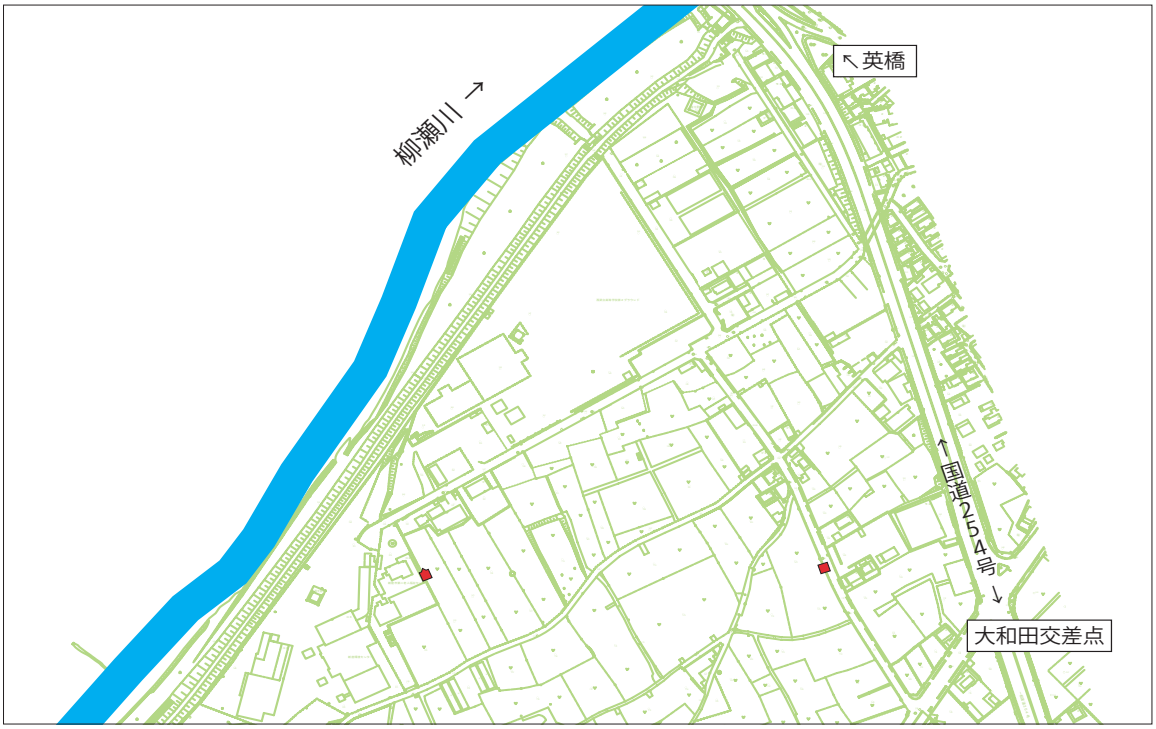

図６－１：８世紀に比定される住居跡の分布

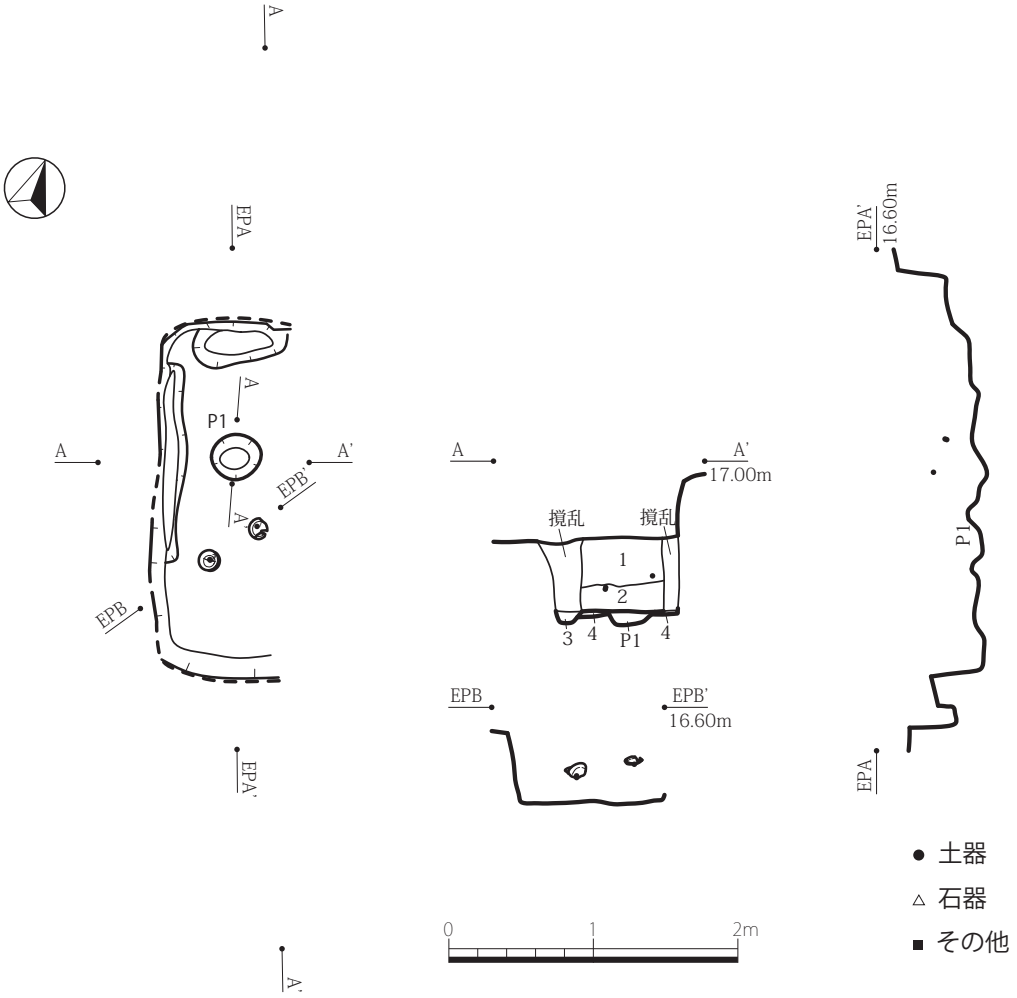

図６－２：８世紀に比定される住居跡（OK_05_SI012）

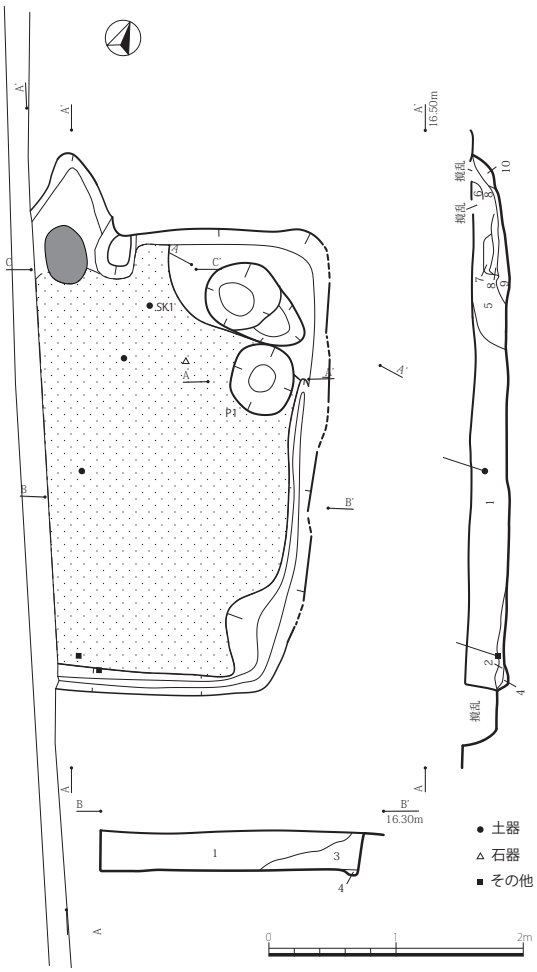

図６－３：８世紀に比定される住居跡と出土品 (OK_03_SI003)

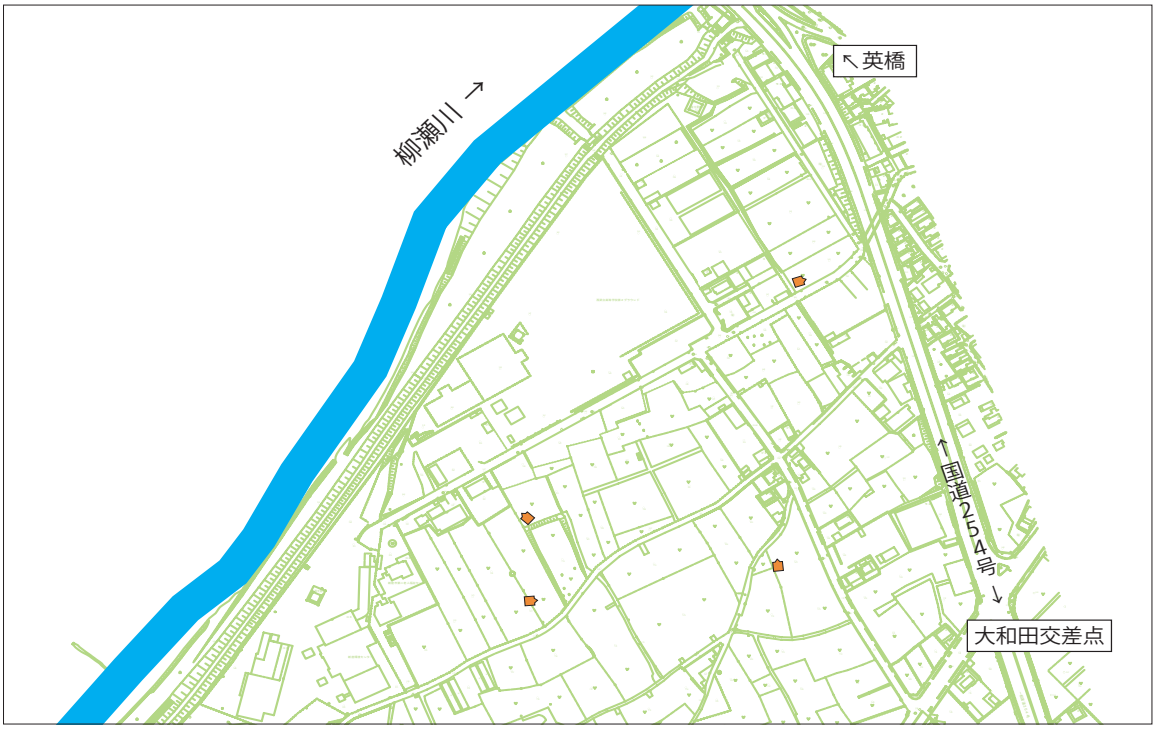

図７－１：９世紀前半に比定される住居跡の分布

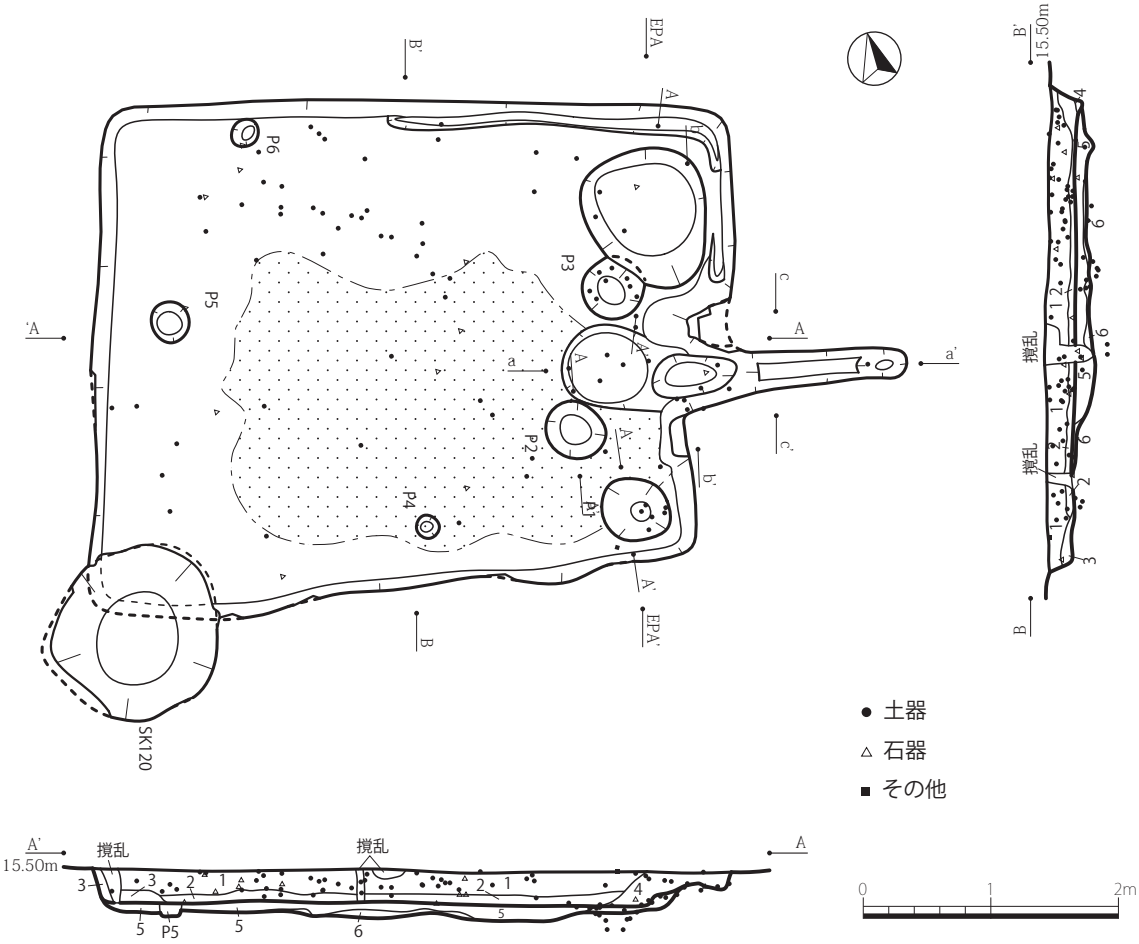

図７－２：９世紀前半に比定される住居跡 (OK_05_SI032)

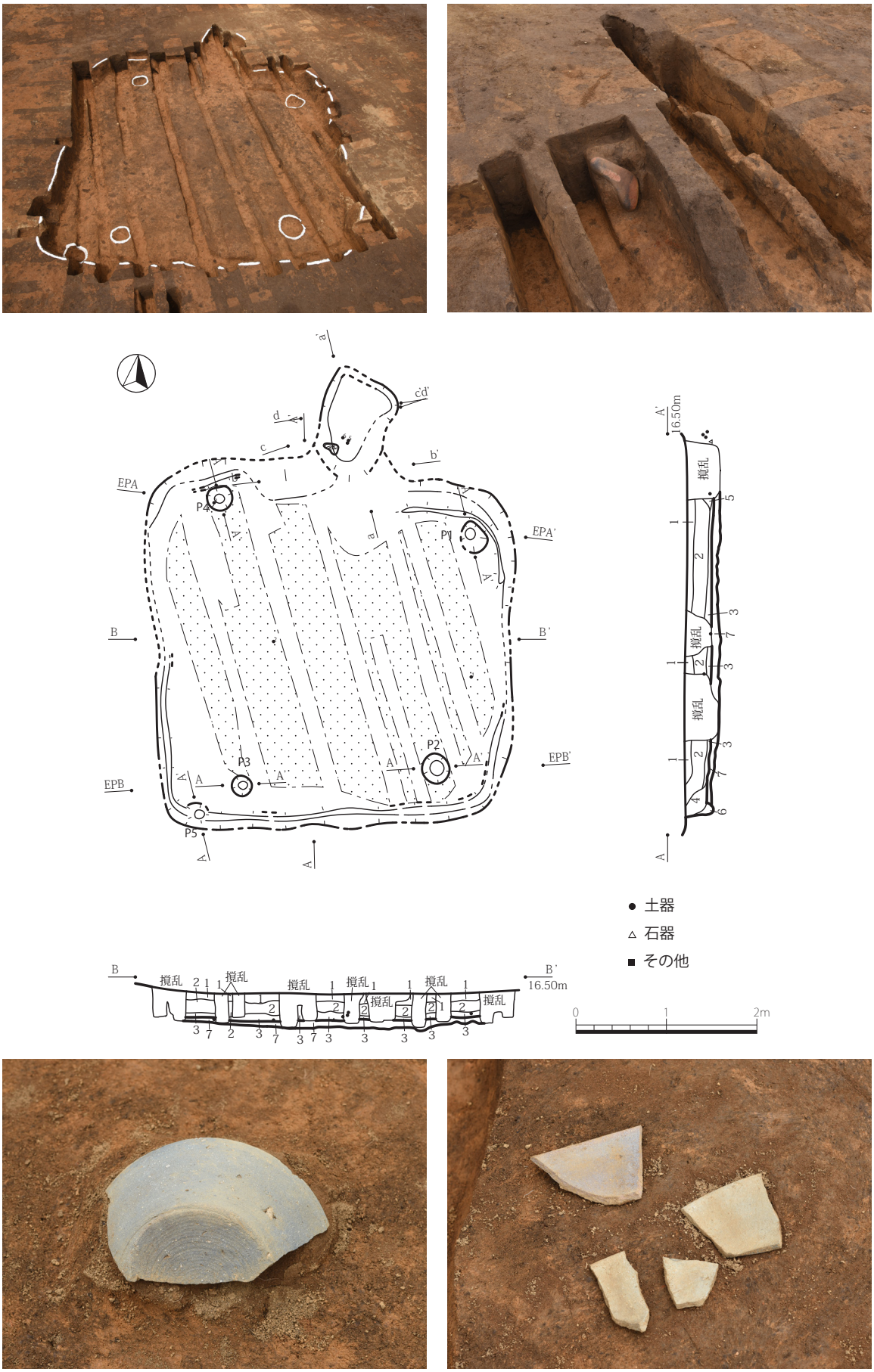

図７－３：９世紀前半に比定される住居跡と出土品 (OK_05_SI015)

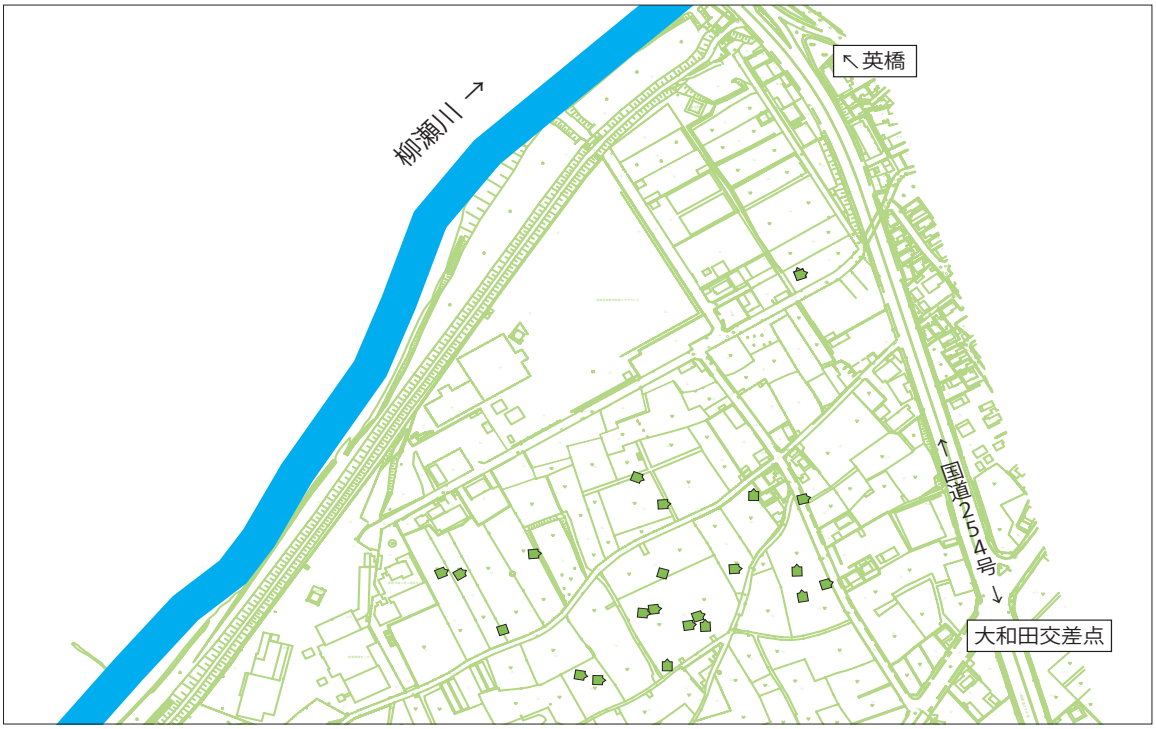

図８－１：９世紀後半に比定される住居跡の分布

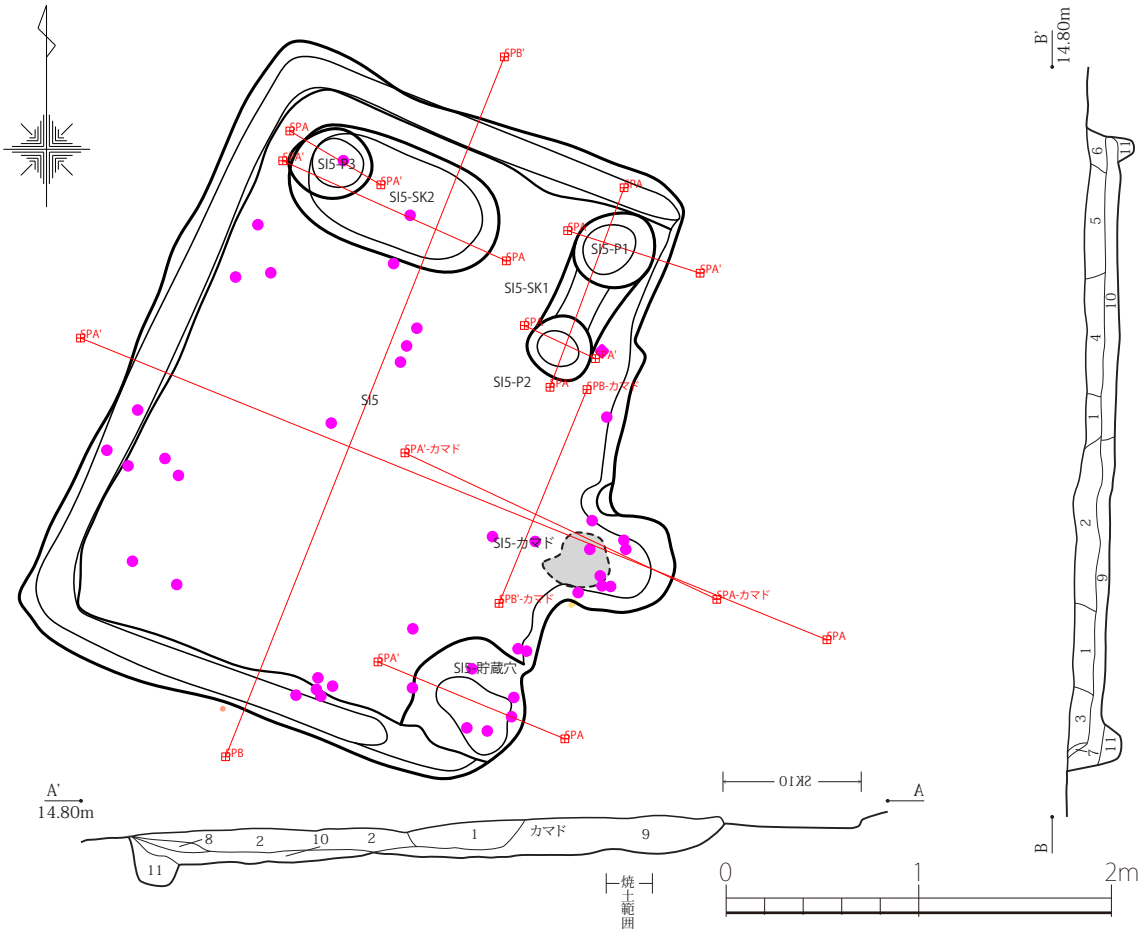

図８－２：９世紀後半に比定される住居跡 (OK_08_SI5)

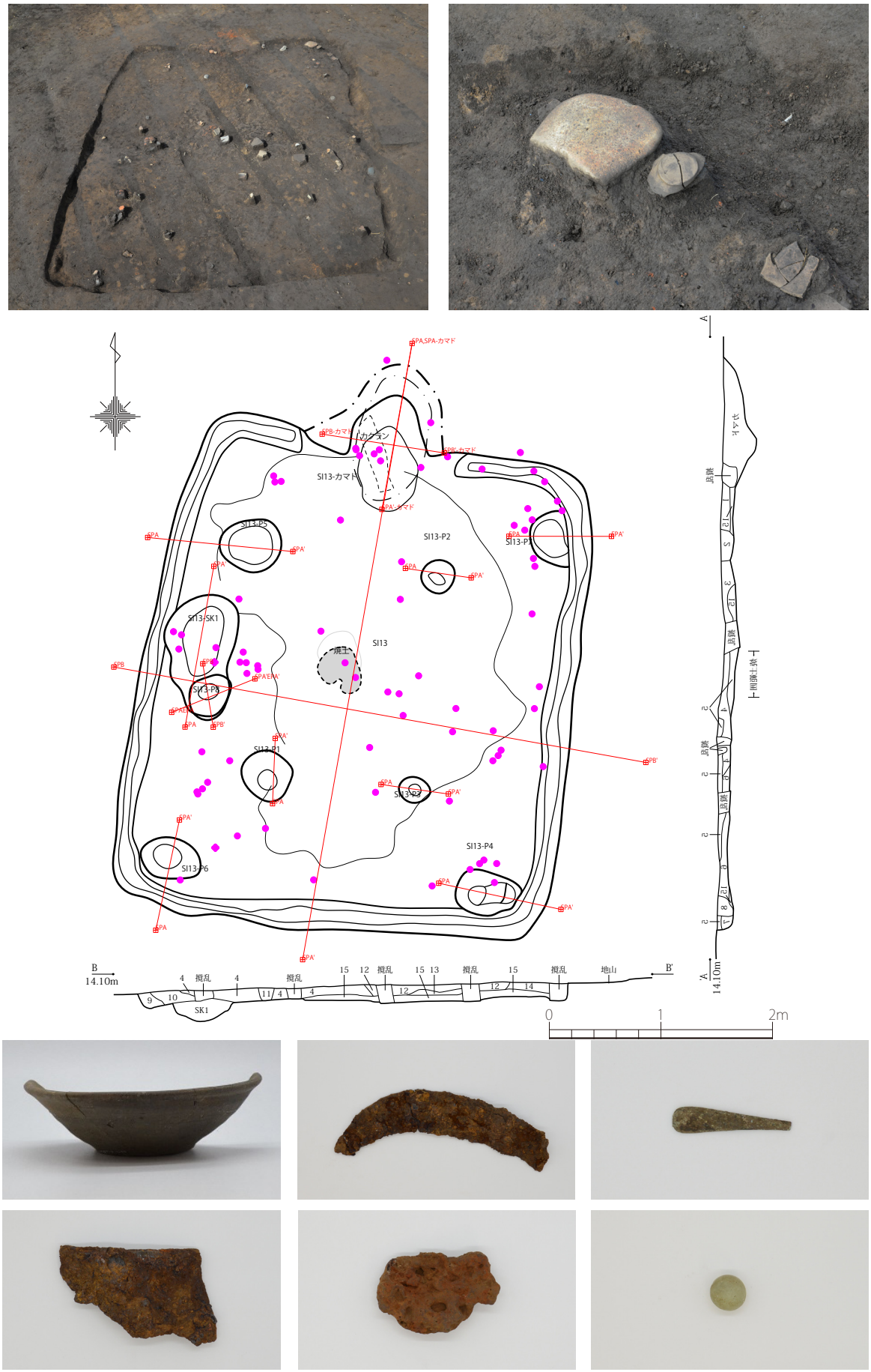

図８－３：９世紀後半に比定される住居跡（小鍛冶）と出土品 (OK_08_SI13)

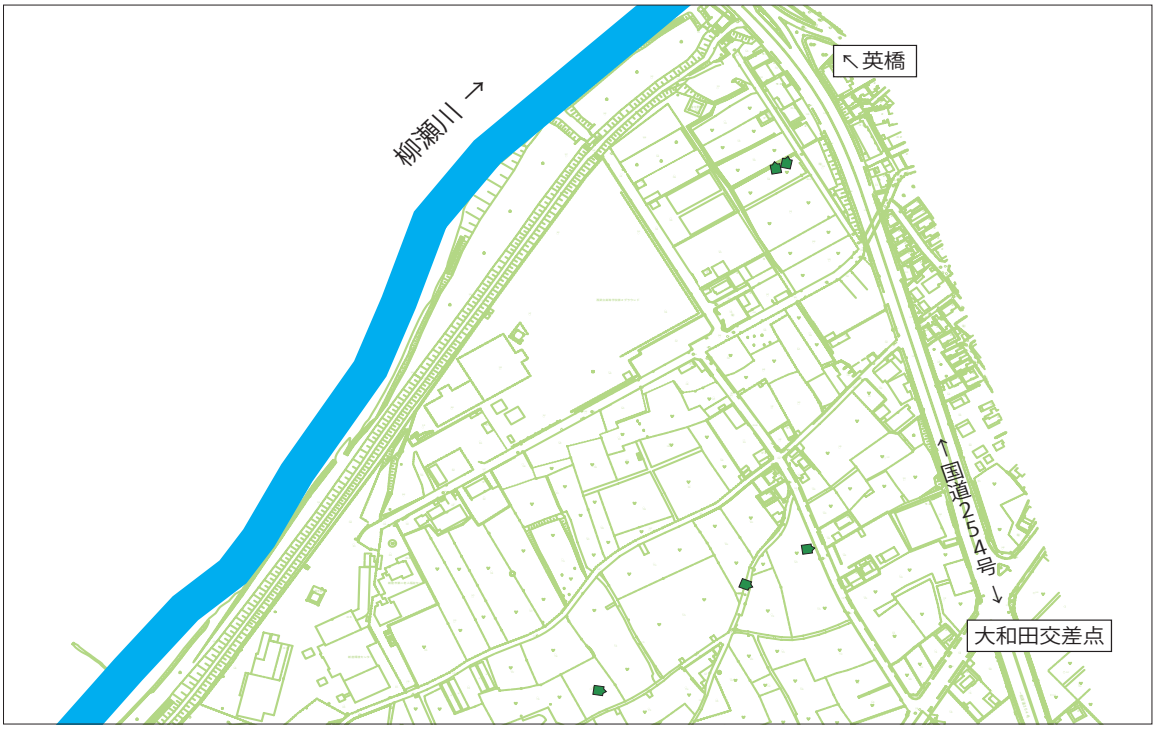

図９－１：１０世紀に比定される住居跡の分布

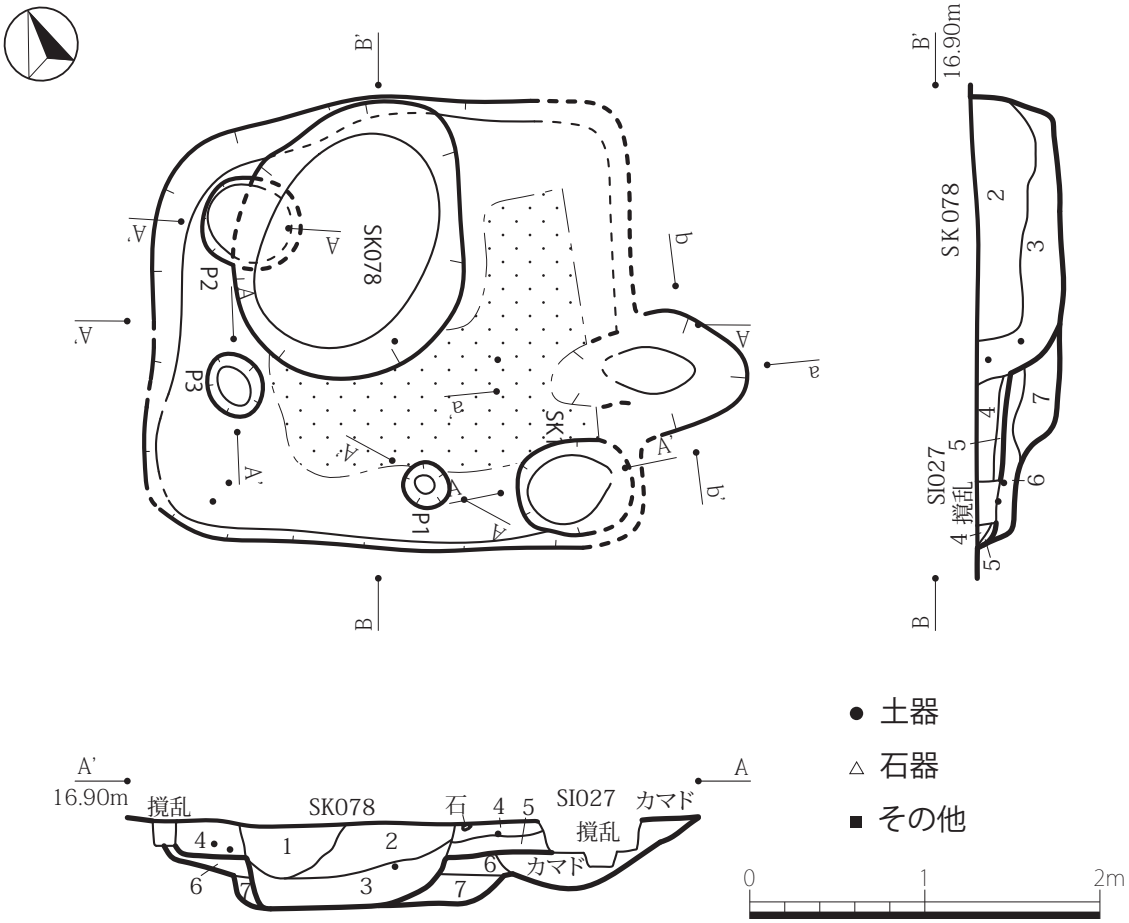

図９－２：１０世紀前半に比定される住居跡 (OK_05_SI027)

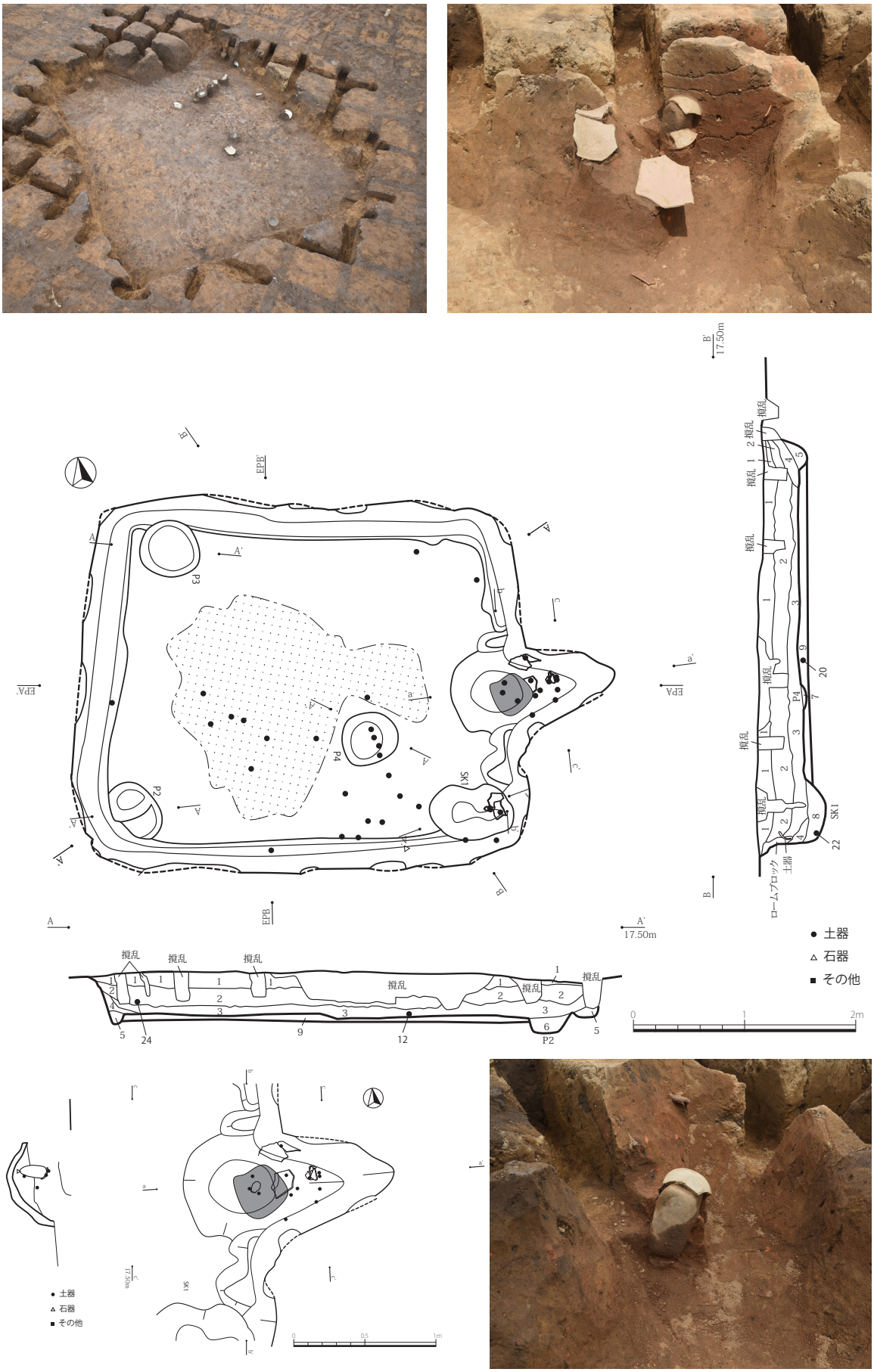

図９－３：１０世紀前半に比定される住居跡と出土品 (OK_03_SI005)

４．事例紹介：平安時代の遺構・遺物

１つ目は、大和田カミ遺跡第１０地点第１号住居跡である。平面形態は 4.00m × 3.40m 長方形で、東壁にカマドを有する。幅 30 ㎝前後の周溝が全周するが、その上 20 ㎝程で須恵器坏がまとまって出土し、南壁際では４点、北壁際では２点の坏と完形の蓋１点が並び、ほぼ正位置で検出されている。住居跡が廃棄された後、竪穴が埋没する過程で、意図的に設置したものと見てよいだろう。いずれも９世紀前半に比定され、東金子窯で生産されたものであると推定される。

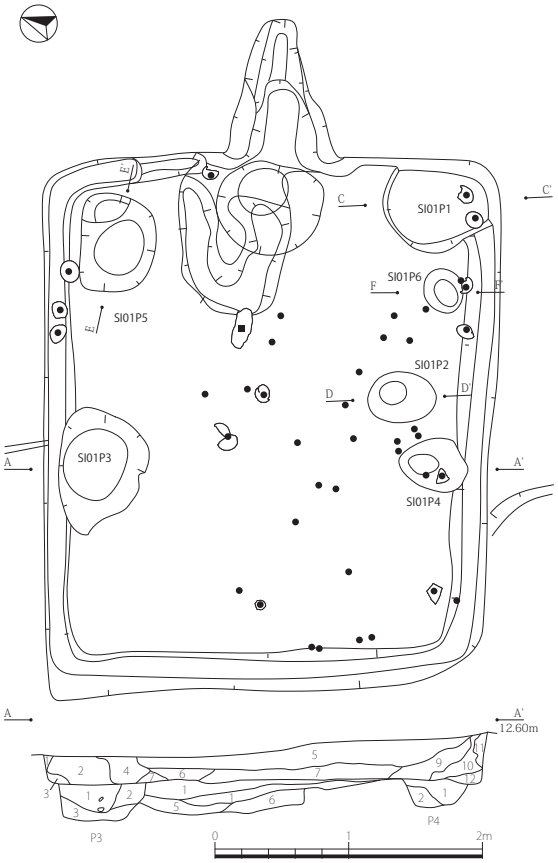

図１０：大和田カミ遺跡第１０地点第１号住居跡及び出土品（OK_10_SI01）

２つ目は、同第１０地点第３号住居跡である。平面形態は 5.38m × 4.38 mの長方形で、他の住居跡より規模がやや大きい。北側にカマドを有し、構築材として瓦片が利用されている。また、P1 では完形の丸瓦が広端を上に直立して検出されている。さらに、同一地点で３回の建替えを行っており、うち１回は覆土に砂利層が堆積していて、洪水被害の後に建て直したようである。瓦の発見自体が稀であること、場所に固執して家を建てていることから、「大和田カミ村の村長」のような人物が住んでいたのではないか、という想像が膨らむ。

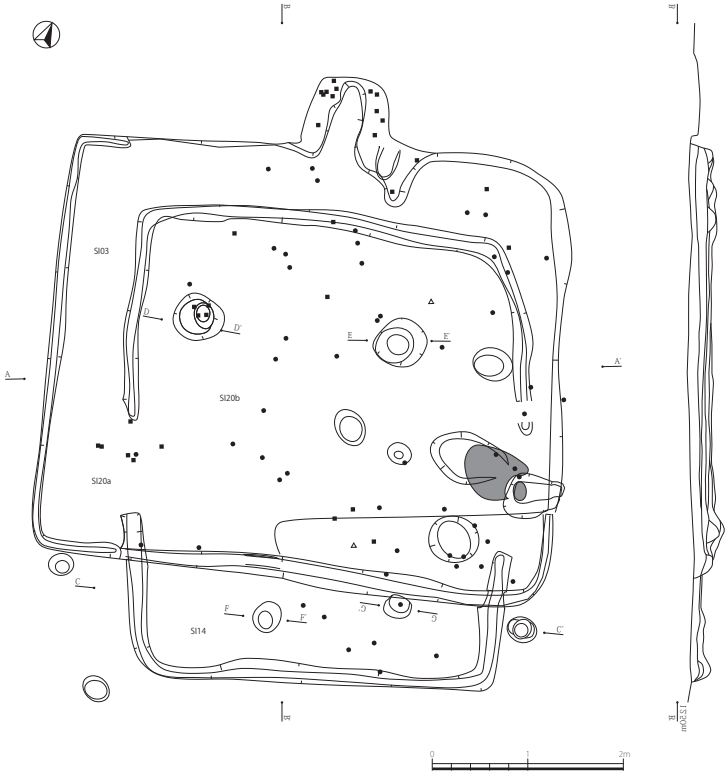

図１１：大和田カミ遺跡第１０地点第３号住居跡及び出土品（OK_10_SI03）

５．墨書土器

大和田カミ遺跡からは、現在までに１３点（１５か所）の墨書土器が発見されている。その中から、文字が判別可能な事例を以下で紹介し、「全国墨書・刻書土器、文字瓦横断検索データベース」（以下、「ＤＢ」と略す）を基に、武蔵国の範囲での出土状況との簡単な比較を行ってみる。

まず、「九」と読める須恵器の坏（図１２－１）が１点見つかっており、外底面に大きく書かれている。ＤＢによれば、「九」の文字は２３例あり、９世紀の資料が多い。他の事例を見ても、大和田カミの例ほど大きく、はっきりしたものはないように見える。

図１２－１：坏の外底面に「九」（OK_05_SI32）

次に、「禾」と読める須恵器の皿（図１２－２）が１点見つかっており、外底面の中央やや上に書かれている。ＤＢによれば、「禾」の文字は５例あり、８～１０世紀の資料がある。白色針状物質を含むため、南比企産であり、須恵器の年代は９世紀後半と推定される。

図１２－２：皿の外底面に「禾」（OK_05_SII0）

続いて、内側面に「山口」あるいは「山田」と読める須恵器の坏（図１２－３）が１点見つかっている。ＤＢによれば、「山口」は神奈川県で２例のみであり、「山田」は国府・国分寺関連遺跡を中心に２８例が見つかっている。『倭名類聚鈔』の「入間郡」の項には「山田」郷も記載されており、この資料も「山田」と読む可能性が高いと言えよう。

特徴的な事例として、外側面「廾」、内面底「又」と読める須恵器の坏（図１２－４）が１点見つかっている。ＤＢによれば、「廾」は２８例あり、下宿内山遺跡の３例も含まれる。「又」は９８例あり、うち９３例が鶴ヶ島市の一天狗遺跡に集中している。「又」は外底面

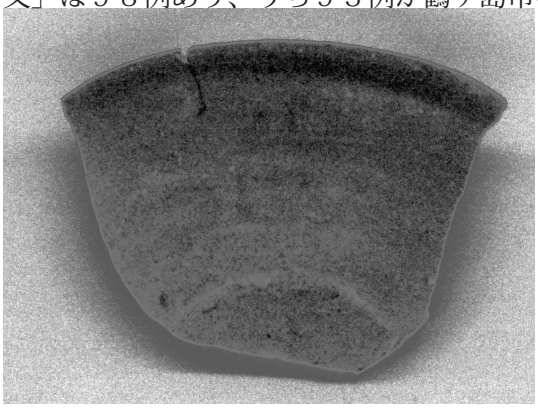

図１２－３：坏の内側面に「山田」か「山口」。右図は墨書を強調するため加筆してある。

図１２－４：坏の外側面に「廾」、内面底「又」(OK_04_SI01)

に書かれる事例が大半を占めているが、この資料はすでに「廾」と書かれていたため、内底面に書いたのだろうか。なお、内外面に墨書を有する土器はもう１点発見されているが、文字の判別はできない。

６．予察

大和田カミ遺跡群において、奈良・平安時代の住居跡はこれまでに５０軒ほど発見されているが、８世紀に属する住居跡は２～３軒のみであり、他は９世紀前半から１０世紀初頭のものであると推定される。特に、９世紀後半に住居跡が急増していることから、他所から「開拓者」が移住してきたという印象を受ける。出土する土器は、南比企産と東金子産の須恵器であり、東金子窯産のものが優勢である。わずかに土師器や灰釉陶器も出土している。

大和田カミ遺跡群は、柳瀬川の水面との高低差がほとんどない地域に広がっており、川へのアクセスを重視しながら開拓に着手したと考えられる。また、柳瀬川を下れば新河岸川に至り、志木市・朝霞市・和光市の同時期の遺跡へと通じている。各遺跡の間で、舟を用いた河川交通や、川と自然堤防に沿った陸上交通があったと想定してもよいだろう。

遺跡からは掘立柱建物跡や鉄製鎌も少し出土しており、後世の状況も勘案すると、水田耕作が行われていたと考えられる。当時はまだ珍しい瓦を多く有する住居や、鍛冶を行ったと思われる住居もあり、独立した小集落の可能性もあるが、隣接する下宿内山遺跡との関係を明らかにしておく必要がある。

１０世紀になると、大和田カミ遺跡から住居跡はほぼ発見されていないが、鎌倉時代には大和田郷や普光明寺が文献に登場するため、大和田地区の歴史を解明する上では、両者の間を補うような資料の発見が望まれる。

謝辞

須恵器等の年代や産地につきましては、坂戸市の加藤恭朗氏と所沢市の根本靖氏に御教示を賜りました。また、本発表は、大和田カミ遺跡群の発掘調査及び整理作業に参加された方々や、大和田二・三丁目地区土地区画整理事業に携わる方々の御協力があって実現しました。末筆ながら、記して感謝の意を表します。